

a) A洞窟

A洞窟の最奥部はこれまでの調査の中で確認された4回の出産・哺育期のうち3回にわたりヤエヤマコキクガシラコウモリが出産・哺育場所として利用していた。ねぐらとして利用しているA洞窟の最奥部は着陸帯の端部にあたる緑地帯の直下に位置し、滑走路の中心からは約150m離れており、地表から約5mの深さと推定された。

航空機の離発着に伴う振動は、現空港における着陸時の振動測定結果に基づき事業実施区域の地盤を想定して行った予測結果から、すぐに減衰し伝播しないと予測されているため、A洞窟内へは伝播しないと予測される。

騒音については、A洞窟の洞口が滑走路の中心から約450mの距離にあり洞口付近で75~80dB(A)と予測された。しかし、A洞窟の洞内はすぐに見通しがきかなくなる屈曲の続く構造であり、洞内の騒音はほとんど伝播しないと考えられる(図-6.12.1.2(40))。小型コウモリ類が昼間のねぐらとして利用している場所は、洞口からの光が届かないような屈曲部の奥である。

以上のことから、航空機の離発着に伴う騒音・振動に起因してA洞窟を利用する小型コウモリ類の生息状況が変化することはないと予測される。

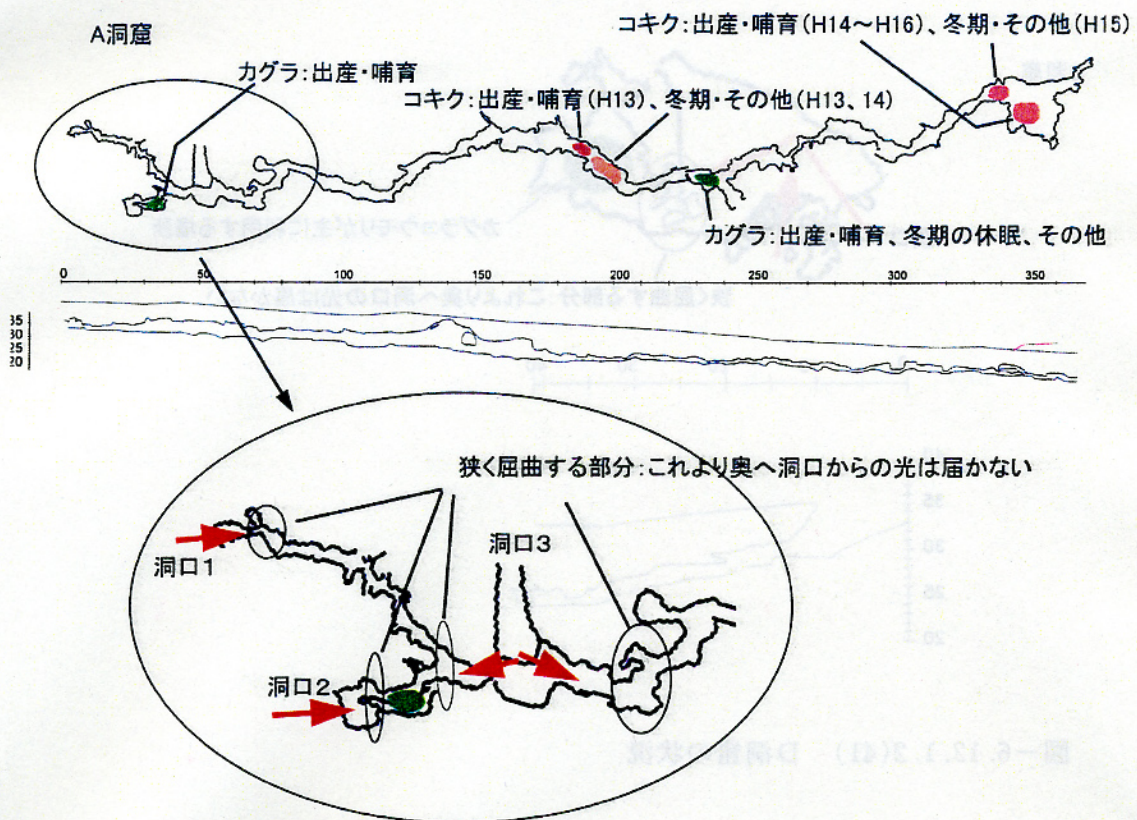


図-6.12.1.2(40) A洞窟の状況